

海域の概要

本湾は、沖縄県中部の金武町・石川市・具志川市・与那城町に囲まれている湾で、東部が太平洋に向かって開いています。湾内ではクルマエビやシャコガイの養殖が行われています。



Specification

諸元

湾口幅：5 6 6 km

面積：1 0 9.5 8 km²

湾内最大水深：56 m

湾口最大水深：56 m

閉鎖度指標：1 8 5

備考：環境基準類型指定水域

Location

範囲または位置

沖縄県国頭郡金武町金武岬と中頭郡与那城村伊計島北端を結ぶ線、同村伊計大橋、桃原橋及び陸岸により囲まれた海域。



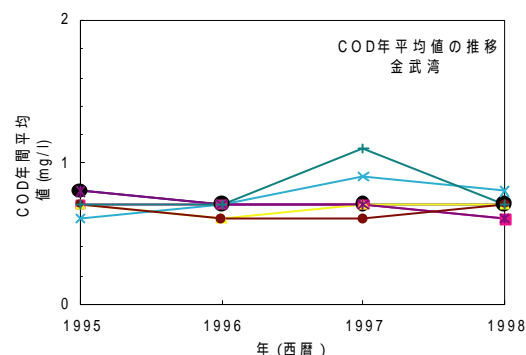
環境

沖縄本島の中央部東海岸に位置し、島の西方を黒潮本流が北上しています。気候は、南西諸島気候区に属し、一年中暖かく雨が多い亜熱帯気候を示します。

湾内には天願川など数本の河川が流入しています。

金武湾の水質環境基準はA類型（平成10年度）に指定されており、全般に水質は良好です。1997年に石川市の下水処理場前で若干悪くなりましたが、1998年に全地点で1mg/l以下を示しています。

湾内の底質は、粗粒砂から細粒砂ですが、陸域から流入する赤土が堆積する場所も多く、また、降雨時などの赤土流出時には養殖業などの漁業や生息する生物に被害を及ぼすこともあり問題となっています。



自然

金武湾の海底地形は全体的に緩やかな勾配となっていて、浜比嘉島周辺、平安座島の東側はサンゴ礁が点在しています。億首川金武町をはじめとして、琉球石灰岩が広大に分布するため、地下水が豊富で金武大川や慶武田川などの横井戸が発達しています。

海域では、国の天然記念物でもあるジュゴンが湾口付近で確認されています。湾岸の貴重な動植物として、具志川市の天願棧橋付近でイボイモリ、宜野座村漢那でアマミアカシア林、金武町億首川でオヒルギやメヒルギのマングローブ、宮城島・伊計島で石灰岩地植生がみられます。その他に、隆起珊瑚植生、アダン - オオハマボウ群落、ナガミビチョウジ - クスノハカエデ群落、リュウキュウマツ群落の自然植生が分布しています。



イボイモリ

文化歴史

金武湾港は、古くから与那原、泡瀬、馬天等から山原、沖永良部、奄美及び本土への航路の中継点、避難港として利用されてきました。港湾整備は1965年頃からの石油精油所やターミナルから始まり、現在では赤崎地区での電源立地によりエネルギー港湾としての重要性が高まっています。

第二次世界大戦の終結にともない米軍により沖縄本島の9箇所に避難民収容所が設けられました。その中で一番人口が多くかつ地の利を得ていたことから湾奥に位置する石川市に沖縄諮詢会（琉球政府の前身）が設立され、金武湾奥の石川市は期せずして戦後沖縄の政治、経済、文化、教育発祥の由緒あるまちとなりました。

産業

金武湾では、金武町から石川市にかけてはフエフキダイ、アジ、ハタ等、具志川市沖合はヒラアジ、アオリイカ等、伊計島沖合ではフエフキダイ、カツオ、サワラ等の漁場となっています。

観光産業として、沖縄県内でも最も闘牛の盛んな具志川市では、安慶名城跡の隣りにある安慶名闘牛場で毎月、闘牛大会が開かれています。



具志川の闘牛